

大通公園を望む窓辺から

日本の男女共同参画について

常任理事 水谷 匡宏

ショッキングなことに、ある雑誌に日本の男女差別指數（ジェンダー・ギャップ）が世界149カ国中の110位に低迷していると報告されている。これを受け日本医療界では女性医師の職場進出を推進するため、2020年までに指導的立場の女性の割合を30%に引き上げる）を展開中であるが、残念ながら今年中の達成は無理な状況にある。近年では法人化した大きな学会（日本循環器学会など）の社員（代議員）選挙にあたっては女性医師枠を特別枠として設ける傾向にあるが、各学会の立てた目標値にはほど遠い状況にある。

日本医師会では男女共同参画運動を推進するため、毎年全国各都道府県の持ち回りで大掛かりなフォーラムが開催されており、全国の女性医師の勤務改善と子育て支援の拡充に力を注いでいる。幸い北海道医師会では全国に先駆けて男女共同参画運動に取り組み、その成功したモデルケースとして大変高い評価を得ている。さらに昨年度よりキャリアサポート相談窓口として新たに女性医師に限らずにすべての医師を対象に、キャリア相談をはじめとして男女の別なく医師が働きやすい環境の整備、定年後の雇用継続などの復職支援にも積極的に取り組んでいる。昨年秋には北海道大学病院の状況について当会の長瀬会長とともに私も担当役員として訪問させていただいた。その会合ではこの共同参画運動を担当している女性医師10人と意見交換を行った。さらに女性医師の勤務環境整備の取り組みについて秋田病院長から大学病院と大学本部とに難しい関係はあるものの、病院勤務女性医師には付属保育園を気軽に利用できるような施設の拡充を図り、就労環境の改善に結び付けたいとの前向きな発言をいただいた。さらに今話題となっている医師の働き方改革では、時間外労働を制限し過労死を減らそうとしているが、医師の労働問題の中には女性医師の就労改革も重要であるとの認識の一一致を得た。

最後に現在国連事務次長で活躍の中満泉氏（57歳）は自分自身の言葉として、「ジェンダー平等は世界の常識であり、社会全体のメリットになる」とのコメントを発している。少なくとも日本国内においては差別ランキングの順位を徐々に引き上げる運動を推進し、先進国並みの就労状況に改善する必要がある。



いま思うこと

理事 久島 貞一

体力の低下を感じることが多くなり散歩に出かけるようになりました。近くにある高校のグラウンドのそばを歩きながら野球部の皆さんの元気な練習風景に触れていました。練習中にもかかわらず「ここにちは！」と元気よく挨拶してくれる彼らの姿に心が躍り、若返る気分です。白球を追うといいますが、彼らが一生懸命、打ったり、投げたりしているのは土にまみれた黒に近いボールです。そんなボールを大切に拾い集めている姿に思わず「頑張ってね！」という言葉が出てきます。彼らの純真さに心が洗われる気持ちです。

そんな時、自分が子供だった頃を思い出します。早春の暖かい日、雪解けの小川ひとり、日当たりのいい場所で咲く黄色い福寿草を見つけたときのうれしさ、初夏に知り合いの農家を訪ね、大きな畑の奥にある鈴蘭の群生に出会ったときのあの感動。真っ白な可憐な花びらと独特な香りを今も鮮明に思い出します。夏の終わりころ教室では薄荷の香りで満たされたことがありました。薄荷の一大生産地だったので子供たちが薄荷の葉をハンカチに包んでポケットに忍ばせて登校してくるのです。秋には山葡萄や小桑を採りに山に行きました。山葡萄のあの酸味の強い味が懐かしくて今も市場で見つけると思わず買ってしまいます。小桑を食べた後の尻の痒みも懐かしく思い出します。冬はスキーを担いで近くの山まで歩きます。勿論リフトなどはありませんから時間をかけ斜面を登ります。滑り降りるのはあっという間です。そんな懐かしい思い出がいっぱい浮かんでは消えてゆきます。幸せな時間だったと思います。

COVID-19の感染が世界中で拡大しています。子供たちのストレスが心配されます。こんな時期だからこそ子供達にも親にも安心して自然と親しむ機会を持っていただきたい、そして皆が心を豊かにしてもらいたいと願っています。（3月15日記）